

第2回代議員会

令和6年2月20日(木)14:00~

岐阜市教育研究所

1 会長あいさつ

会 長 吉田 秀慈

2 本年度の振り返りとまとめ

(1) 令和5年度の歩みについて

主 務 内海 照幸

(2) 研究実践のまとめ

授業研究委員長 古田 伸二

(3) 各分野研究実践の振り返り

・地理的分野

地理分野長 勝野 陽介

・歴史的分野

歴史分野長 稲垣 直斗

・公民的分野

公民分野長 前島 久恵

・資料集改訂

資料集改訂委員長 梅村 亮介

(4) 西濃大会報告

西濃地区研究推進委員長 滝 貴子

(5) 会計中間報告

・一般会計

一般会計 箕浦 和宏

・特別会計

特別会計 野原 克洋

3 各郡市の活動報告

各郡市代議員

4 お知らせ

(1) 社会科研究65号について

(2) 資料集等の選定に関わって

(3) 令和6年度代議員, 授業研究委員の選出及び引き継ぎに関わって

(4) 北方領土事業報告

(5) その他

6 副会長あいさつ

副会長

「価値に関する認識を形成する授業」への挑戦と実践

岐阜県小中学校教育研究会 中学校社会科部会
大垣市立西中学校 校長 吉田 秀慈

今年度は、10月31日（金）に、コロナ禍で延期されていた西濃大会（県大会）が、4年ぶりに開催されました。これまで授業公開もなかなか出来ず、厳しい状況の中での研究でありましたが、コロナ禍であったが故、生徒一人一台のタブレット端末が貸与され、それを活用しての授業が可能となりました。また、研究授業や研究会もオンラインをつかって、遠方からの視聴が可能となるなど、様々な方法での研究推進ができるようになってきました。本大会においても、3会場に分かれての全体会の開催、各会場の授業や研究会もオンラインでの参加も可とし、ハイブリッド式の大会としました。その結果コロナ禍前の参加よりも大変多くの社会科部員の皆様に参加していただくことができました。本当にありがとうございました。

今回の西濃大会の大きな目的は、岐中社が提唱している「価値に関する認識を形成する授業」を岐阜県内の社会科部員の皆様に理解していただき、広く実践していただくことでした。そのため、今回の大会では、研究内容2-②「価値に関する認識を形成する授業モデルの定着・発展」に重点をあて、研究を進めてきました。

歴史的分野については、結論が定まっており、「価値に関する認識を形成する授業」を創り上げることが非常に困難であったため、授業展開において「価値に関する認識を形成する授業」の要素を取り入れた授業を工夫し創造しました。地理的分野では、過去の南アメリカ州の実践をもとに、新たな単元の開発に努め、アフリカ州において、「価値に関する認識を形成する授業」が可能であるかどうかを吟味し、挑戦しました。公民的分野では、課題に対する互いの考えの違いに折り合いをつけたり、合意形成をしたりするための条件として「留保条件」を取り入れた授業づくりに努め、研究を進めてきました。

今回の研究会では、社会科部員の皆様から、歴史や地理では「価値に関する認識を形成する授業」を行うためには、「事実に関する認識を獲得する授業」を確実に行った上でないと成立しないのではないかといったご意見や「単元全体を通して、価値に関する認識を形成する授業をどう位置付けてくのかを吟味していく必要がある」などの今後につながるご意見を頂くなど、大変熱心な議論がなされました。さらに、岐阜県教育委員会の先生方からも丁寧なご指導をいただき、次の美濃大会に向けての方向が見いだされつつあるのを感じます。

さて、昨今の社会においては、コロナの収束からインフルエンザの拡大、ロシアとウクライナ、イスラエルとハマスの紛争など、これまで以上に予測困難な時代となりつつあり、世界だけでなく日本にとっても様々な課題が山積みつつあります。これらの事象はなかなか結論が出ない状況であり、多様な価値が混在していると思われます。しかし、こうした中で私たちは、様々な立場で価値を認識し、どこかで終着点を見出さなくてはなりません。また、条件を提示して折り合いをつけたり、妥協したりして、選択・判断をしなくてはなりません。これからの社会は予測困難であるからこそ、本研究は、生徒たちが生きていく上で、大切な学びとなると考えます。

また、昨年度の名古屋大会と今年度の栃木大会の両全国大会に参加させていただき、岐中社の研究は、まさに全国で行われている研究内容を踏襲しているとともに、より先進的な研究であることを実感することができました。今年度の栃木大会の公民の公開授業の一つに、本時の課題（栃木大会では本時のめあて）「よりよい社会を実現するためには、どの政党に投票すればよいだろうか」では、生徒たちは、様々な政策を選択・判断しながら議論を進めていく授業がありました。

この授業を観させていただき、思い出したのが、29年前、私自身が30歳の時に、中社研で授業公開したことです。その時の私は、社会科の指導の在り方について迷いながらも教材研究に尽力し、様々な授業展開にチャレンジし始めた時でした。その授業では、各政党の政策については、生徒に各党首に演じさせ、政見放送をビデオ撮りして、公開授業の導入でそのビデオを見せた後、様々な政党のよさや課題を議論し合い、最終的に市役所に借りた本物の記載台で実際に投票させました。その投票結果から各政党の政策について選択・判断した理由をまとめるといった授業でした。この授業は今回の全国大会の非常に類似しており、今から考えると、選択・判断の授業展開や主権者教育を実践していたのではないかと思います。若いころに熱意をもって、様々な授業に挑戦することの大切さを実感しました。

生徒たちは、中学を卒業して3年後には、選挙権をもち、選択・判断をすることになります。私たち社会科教員は、その判断をする際に必要な力を育成する必要があります。その力を育成するための一つの手立てが「価値に関する認識を形成する授業」を実践であることは間違いないと思います。今後も、社会科部員の皆様には失敗を恐れることなく、様々な授業に挑戦し、実践を通して議論し合い、主体的に社会の形成に参画する力を育てていただきたいと思います。

最後に、本部会の活動にご支援、ご助言をいただいた岐阜県教育委員会、岐阜大学をはじめ、関係諸機関のみなさまに、心から感謝申し上げます。

令和5年度事業報告

岐中社主務：内海 照幸

1 令和5年度を振り返って

岐中社では、今年度も「主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」という研究テーマのもとで、県下の社会科の先生方に実践を積みかねていただきました。今年度は、10月31日（火）岐阜県中学校社会科研究部会西濃地区大会が現地開催とオンライン開催のハイブリット式で盛大に行われ、150名近くの先生方が参加されました。これまで本大会に向けて、西濃地区の社会科の先生方の熱心な研究の成果が子供の姿となって、学びの多い大会となりました。西濃地区の先生方、本当にありがとうございました。また、岐中社の研究としても3分野とも授業研究委員会を開催し、研究テーマの具現の基、活発な議論を進めることができました。

本年度の成果は、以下の2点であると考えています。

（1）西濃地区大会から成果と課題を明らかにし、今後の岐中社の研究に生かす。

岐中社の研究テーマの具現の基、西濃地区大会において、歴史的分野では「価値に関する認識を形成する授業モデル」の要素を取り入れた「事実に関する認識を獲得する授業モデル」の提案、地理的分野や公民的分野では、「価値に関する認識を形成する授業（課題について、考察を主とする授業）」の提案、また、公民的分野では他分野に先行して、留保条件（折り合いをつけながらの自分なりの最適解を導き出すための条件）を活用する授業の提案をそれぞれしていただきました。この大会を通して、成果と課題を明らかにして、今後の岐中社の研究をブラッシュアップしていきたいと考えています。

（2）ICTの活用による岐中社の活動。

研究授業や諸会議などオンラインで開催し、県下の社会科の先生方が共に学ぶ機会が増えました。また、それに伴い岐中社のHPに3分野の年間指導計画、各種資料が随時更新され、社会科研究が手元になくてもダウンロードして、幅広い先生方に活用していただくことができるようになりました。

今後もHPを通して、岐中社の活動を県下だけでなく全国の社会科の先生方の目に留まるような取り組みをしていきたいと考えています。

2 終わりに

今年度も昨年度に引き続きICT機器の整備をして、「少しでも学び合う場を保証したい。」という願いから、オンラインで会議や授業参観ができるよう取り組んできました。代議員、授業研究員を初めとする岐中社の運営にご協力くださいました会員の皆様、ご指導していただきました先生方に心から感謝申し上げます。

また、授業を提供していただいた勤務校の先生方、本当にありがとうございました。今年度、すべての先生方の支えがあって、岐中社の運営ができました。本当にありがとうございました。

令和5年度事業報告

- (1) 第1回運営委員会 4月27日(木) 岐阜市教育研究所 南舎1階研修室1
- (2) 第1回代議員会 6月8日(木) 岐阜市教育研究所 中舎3階大会議室
・新役員の承認・事業及び会計の報告・事業計画案及び予算案の承認
- (3) 第1回授業研究委員会 6月12日(月) 岐阜市教育研究所 中舎4階大会議室
・各分野における実践計画の決定

・北方領土問題指導者地域研修会(東海北陸ブロック)…(稲垣直斗教諭、古田伸二教諭)

・北方領土問題を考える東海北陸中学生のつどい…中学生5名

運営担当5名程度(養老町立高田中学校)長堀真人教諭

7月27日(木)～28日(金)

H27可茂→H28東濃→H29岐阜→H30西濃→R1美濃→R2西濃→R3飛騨→R4西濃→R5西濃

*今年度は静岡県が主催

・北方領土問題教育指導者現地研修会…今津伸也教諭

・北方四島交流教育関係者事業…中止

・北方領土問題全国教育者会議…山田雅史教諭(東京都) 2月24日(土)～25日(日)

- (5) 第2回授業研究委員会 8月18日(金) 現地とオンラインのハイブリット式
午前:夏季ゼミ 午後:授業研究委員会
会場:大垣市スイトピアセンター
- (6) 授業研究委員会 各分野の計画に従って授業研究会 9月～12月(2回程度)
- (7) 学会への参加はなし
社会系教科教育学会 2月17日(土)・18日(日) 兵庫教育大学
- (8) 全中社栃木大会への参加 11月9日(木)～10日(金) 栃木県宇都宮市
- (9) 第3回授業研究委員会 12月13日(水) 岐阜市教育研究所 中舎3階大会議室
・各分野の研究実践のまとめ
・研究全体のまとめと今後の方向 ・成果刊行物(社会科研究)の原稿検討
- (10) 第2回運営委員会 1月22日(月) 岐阜市教育研究所 中舎4階研修室1
- (11) 第2回代議員会 2月20日(火) 岐阜市教育研究所 中舎4階大会議室
・事業報告及び会計中間報告の承認 ・次年度の研究の方向を確認

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

岐中社 授業研究委員長 関ヶ原町立関ヶ原中学校 古田 伸二

1 はじめに

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次の通り育成することを目指す。

上記は、中学校社会科が目指す教科の目標である。その目標を達成するために、各分野の特性を踏まえた「社会的な見方・考え方」を働かせ、資質・能力を育成するとともに、社会的事象の理解、考察を図ることや、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて考察、構想（選択・判断）することを重視して実践してきた。

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

主体的に社会の形成に参画する力を次のように定義している。

獲得した事実に関する認識に基づき、価値に関する認識を形成していくことを通して、公共的な事柄に自ら取り組もうとする資質や能力

主体的に社会に参画する力を育成するためには、社会に対する理解があり、その上で構想（選択・判断）ができることと捉えている。社会に対する理解を「事実に関する認識」、よりよい構想（選択・判断）をすることを「価値に関する認識」と捉え、次のように定義している。

事実に関する認識（結論が定まっているもの）

社会的事象の意味や意義、事象間の関連等の考察による知識や概念

価値に関する認識（結論が定まっていないもの）

- ・事実に関する認識や、相互の理解を踏まえ、合理的な意思決定をした判断基準の基となる価値【個人内での意思決定】
- ・事実に関する認識を踏まえ、折り合いを付けながら合意形成した構想（選択・判断）【集団での合意形成】

今年度の授業研究委員会の実践や西濃地区大会では、特に「価値に関する認識を形成する授業」の要素を取り入れた実践を重ねることで、公共的な事柄に自ら取り組もうとする資質や能力の育成、つまり、『主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習』の実現に向けて取り組んだ。県内には、夏季ゼミナールにおいて、岐中社との連携を図りながら、研究について説明する機会を設け、理論や実践を広めていった。今年度は、多くの先生方が、「価値に関する認識を形成する（要素を取り入れる）授業」を実践していただいた。その実践を通して、生徒に社会的な見方・考え方を働かせながら、社会的事象等を根拠に自分なりの意思決定をし、主体的に社会と関わる力を育むことができたと感じた。

2 各分野の授業実践の振り返り

○ロイノートなどの効果的な ICT 活用や、議論を取り入れた授業を行うことで、互いの主張をぶつけるだけでなく、仲間の意見とすり合わせながら、よりよい社会のあり方、先人や自己の生き方について、考察、構想（選択・判断）しようとする姿が高まった。

○どの授業にも PDCA のマネジメントサイクルの学習過程や生徒の思考を深める手立てがみられた。特に展開の後段では、これまでの生徒の意識に沿って、問い返しや新たな事象提示を行い、新たな見方・考え方に気付かせたり、考えを深めたりして、再構築させることができた。また、生徒がタブレット端末を活用して、考えを可視化しながら考えを整理したり、仲間との対話により、自分の考えを統合したりする姿もみられた。

●「価値に関する認識を形成する授業」では、選択・判断した内容の基となる根拠が明確でないため、最適解や納得解を見いだすことが難しい。

①「事実に関する認識を獲得する授業」モデルの定着・発展（下記の資料参照）

・より広い視野から、構想（選択・判断）するためには、どんな人が、どのような社会環境や時代背景で、どのような価値（願い）をもっていたかを関連付けることが大切であると考えている。つまり、社会で活用できるような事実に知識や概念的知識（既知の知識と新しい知識の関連付け、知識と経験の結びつき）を獲得するための「事実に関する認識を獲得する授業」が土台となる必要がある。これまでの歩みの中で、岐中社が大切にしてきたことである。来年度は、この認識を深める授業の在り方も再度検討していきたい。ただし、確かな事実に関する認識を獲得させるためには、「指導と評価の一体化」を図り、生徒の学習状況を捉えたうえで、より一層教師の指導改善を図ることが求められると考えている。

「事実に関する認識を踏まえ、折り合いを付けながら合意形成した判断(集団での合意形成)」

営業は控えるべきだと思います。なぜなら(事実)死者も増加しており、病床使用率が高いことから分かるように(概念)現段階では予防が難しく医療機関がパンクしそうです。このままでは、救えるはずの命も救えません。



より正しい、幸せ、正義だ、納得できる...

どれも一理あるな。



認識の深まり

	(医療(人の命)を優先すべき) 飲食店は営業を控える	(経済を優先すべき) 飲食店は通常営業する	認識するに	価値に
	重症化しやすい 予防が不可能 など	概念的な知識	重症化しにくい 予防が可能 など	考察
	感染者数・死者数の増加 病床使用率のひっ迫 など	事実に知識	変異株の症状 ワクチンの開発 など	概念知識

認識の広がり

岐中社西濃地区の大会より

- ・どのような社会環境の場合か?.....コロナ禍での飲食店の営業
- ・どのような人か?.....飲食店の従業員とお客
- ・どのような願いがあるか?.....営業を控えるのがよいか, 通常営業をするのがよいか
- ・どのような価値を大切にするか? ..営業を控える:「医療(人の命)」という価値
 ..通常営業をする:「経済活動」という価値
- ・構想(選択・判断)の基となる知識や概念は何か?
 ..営業を控える:死者数の増加や病床使用率のひっ迫→重症化していて予防は難しい。
 ..通常営業をする:ワクチンの開発など→予防対策ができて重症化しにくい
- ・コロナ禍の飲食店の営業形態の変化:折り合いを付けた構想(選択・判断)
 「感染対策を徹底するならば、感染リスクが軽減する→営業を5時~20時まで短縮する」

②構想（選択・判断）した内容の価値や、その価値を尊重した判断基準を明確にした話合い

- ・「効率」と「公正」や「持続可能な社会」などの視点を焦点化して解決策を追究させることで、単位時間や単元のねらい（育みたい資質・能力）に迫るためのゴールを明確化する。
 - ・生徒が自分の考えを主張しただけで終わらないように、揺さぶりをかける問いの構造化を図る。
- 例「〇〇の視点や〇〇の立場で共通点や相違点ないか？」 →多面的・多角的に考えさせる。
 「もし〇〇ならば〇〇ということにならないか？」 →批判的思考を促す問いにより、折り合い
 「〇〇という価値から取り入れられることはないか？」 をつけて選択・判断させる。

- 「価値に関する認識を形成する授業」は、基本的に現在から未来の問題を取り上げながら、よりよい社会のあり方や自己の生き方を見いだすため、歴史的分野において学習を進めることが難しい。
 - ①「事実に関する認識を獲得する授業」を基本として進める。また、どのような事実をどこまで深く追究させたのかの意図性をもった単元構成を図る。単位時間の展開後段で認識を深める問いや事象提示により、確かな時代相を捉える(歴史観を捉えさせる)。
 - ②「価値に関する認識を形成する授業」の要素を取り入れた「事実に関する認識を獲得する授業」の実践の積み上げ
 - ・単元を通して学んできたことや、展開前段で獲得した知識や概念を基に、展開後段で、人物の判断についてプラスの評価に捉えるか、マイナスの評価に捉えるかなど、人物の願いに迫りながら、政策などについて、価値を分析・検討する。
 - ・時代の転換期を取り上げ、その時代背景を踏まえて課題を追究する。また、どの立場で、どの時間軸で、どのような当時の人々や社会背景からの判断基準かを基に選択・判断し、出口を設定する。
- ※未来のよりよい社会のあり方や自己の生き方を構想(選択・判断)していくためには、過去や現在の分析・吟味等の過程が大切である。よって、歴史的分野や地理的分野では、公民的分野への系統的な接続を意図した学習を計画していくとよいと考えている。

3 終わりに

今年度、授業研究委員会や西濃地区大会の各分野での様々な授業実践から多くのことを学ぶことができた。そして、特に「価値に関する認識を形成する授業」への挑戦により、よりよい社会のあり方や自己の生き方を見だし、主体的に社会に参画する力を育てるためには教師がどんな手立てを講じるとよいのかを検証し、岐阜県の社会科の方向性について共通理解を図ることができた。また、「事実に関する認識を獲得する授業」が生徒の考察、選択・判断を行うための支えとなり、質の高い理解(認識の深まり)を追求していくために必要不可欠であることを再認識できた。地理的分野と歴史的分野の公民的分野の接続への意識も高まってきた。授業を公開してくださった先生方、研究を支えてくださった先生方、校務もある中、本当にありがとうございました。

県大会 西濃地区大会が終わりましたが、次のステップに続く新たなスタートとなります。日常の授業で、生徒に力を付けさせるためのちょっとした手立てを考え、実践を積み上げることを通して、岐中社の理論と実践が県下に広まり、さらに深化させていくことを願っています。

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

地理的分野専門委員長 岐阜市立藍川中学校 勝野 陽介

1 はじめに

今年度、これまで以上に授業研究委員の先生方に授業研究委員会で積極的に発言をしていただけた。西濃大会や全国大会にも多くの先生が自主的に参加するなど、岐中社の「チーム地理的分野」として活動ができ、研究が深まり、学びが多い1年となった。そのことに感謝をし、本年度のまとめとする。

2 研究内容

研究内容1「事実に関する認識を獲得する授業」

教師が積極的な教材研究を行い、魅力ある題材の授業づくりは、社会科の教師にとってとても大切なことである。地理的分野においては、現地に行く、取材をすることが理想である。そのような題材を用いて、「事実に関する認識を獲得する授業」を「授業モデル」に基づき実践していく。その際、3観点となった評価の在り方を明らかにしながら、一昨年、昨年に作成した年間指導計画をバージョンアップしていきたい。

研究内容2「事実に関する認識を獲得する授業」だが、「価値に関する認識を形成する授業」につながる授業

選択・判断を迫る学習（授業ではなく学習）は「事実に関する認識を獲得する授業」の授業モデル【段階Ⅱ】で実践できる。これは、「価値に関する認識を形成する授業」の実践に確実につながる。安易に選択・判断を迫る課題設定をするのではなく、確かな事実認識を獲得することをねらいとしながら、教師の問いかけやコーディネート、レーダーチャートの活用などで、選択・判断もしていく。これを「事実に関する認識を獲得する授業」だが、「価値に関する認識を形成する授業」につながる授業とし、積極的に実践していきたい。

研究内容3「価値に関する認識を形成する授業」

「価値に関する認識を形成する授業」については、地理的な見方・考え方にに基づき、「今日の問題であるか」、「当事者意識をもてるか」を重視すると「南アメリカ州（開発と環境）」「地域の在り方」の単元で実践できる。この単元を中心に「価値に関する認識を形成する授業」の授業モデル②に基づき、留保条件を用いたり、合意形成したりすることに挑みたい。その際、ツールミン図式の学習プリントの活用などで思考の可視化を図ったり、判断基準の明確化や異なる判断基準に気付きにつなげたりしたい。また、評価規準を明確化していきたい。特に、主体的に学習に取り組む態度の在り方に着目したい。

3 授業実践

授業実践1 美濃市立美濃中学校

授業者：二宮 諒 教諭

単元名：「アフリカ州」

【概要】「鉱産資源が取れるアフリカ州で貧しい地域が多いのはなぜだろう。」という課題について、ICTを活用して生徒自ら資料を選び、読み取ることを通して、モノカルチャー経済の問題点を産業の面から理解する「事実に関する認識を獲得する授業」の実践。

【授業実践1の考察】

- 資料選択できる力の育成を目指し、3年間を見通して付けたい力を明確にして、中1では教師が用意した資料から選択をさせることに重点を置いている。
⇒教師から与えられた資料だけでなく、自ら課題解決に向けて資料を探し、資料を選択できる力を育てようとしていることは意味あること。
- ⇒選ぶ力も大切だが、中1だからこそ、地図帳、統計資料の使い方、雨温図、主題図の読み取り方を確実に指導しきることが大切である。
- ⇒「世界各地の人々の生活と環境」と「アジア州」の単元を終えたなら、円グラフは割合、棒グラフは変化、折れ線グラフは推移を表していることは指導済みで、資料活用ができるようになっていくことが大切である。
- 効果的にICTを活用している。
⇒特に、「個別最適な学び」の実現において、ICT活用は有効である。
- ⇒ICT活用においても、地理的な見方・考え方を駆使することに留意すべき。地理の授業なので「どこに、何が、どのように、どれくらい。」を生徒が語ることができるようにしたい。
- 小集団交流を6人の生活班で行っていた。
⇒3人～4人の学習班が小集団交流や話し合いには適している。6人では多すぎる。また、小集団交流を行う意図をはっきりさせたい。

授業実践2 恵那市立恵那東中学校

授業者：藤川 拓実 教諭

単元名：「北アメリカ州」

【概要】 「アメリカ合衆国を発展させたのは、移民なのか。」という課題で、単元の終末に位置付けた2時間構成の授業。1時間目は各自で調べてまとめる時間。2時間目の本時は、「移民」だけでなく「広大な土地」「国の政策」などの異なった仲間の視点の意見を基に、ディベート的対話をしながら、自身の意見と比べ、転用したり、批評したりすることで多面的・多角的に考察をする授業の実践。

【授業実践2の考察】

○ディベート的対話の授業展開において、生徒が異なる視点の生徒に質問をすることで、話し合いが活発になったり、挙手が増えたりした。

⇒生徒が前時によく調べて、自分の考えを資料を活用してわかりやすくまとめていた。考えを伝えたいという生徒が多くいたのは、日常の指導の賜物である。

⇒ディベートの場合は、立論の後、反対尋問や反駁で、相手の論理の矛盾を攻撃したり、質問や批判に対して反論をしたりする。これは、論の根拠となる各自が重視する「価値」を明らかにすることにつながる。ディベートの授業実践は、研究内容2の「事実に関する認識を獲得する授業」だが、「価値に関する認識を形成する授業」につながる授業の実践となりえる。

●地球的課題として、移民問題を取り上げたいという指導観はいいが、課題として「アメリカを発展させたのは移民なのか。」という課題は適切ではなかった。

⇒移民の定義があいまいではなかったか。知識として確実に押さえておきたかった。ヨーロッパ系、アフリカ系、ヒスパニック系、近年のICTに関するアジア系では、時代背景も経済発展における要素も違うため、生徒同士で意見の交わりやぶつかりが生じにくくなってしまう。

⇒移民がその要素であることは否定できない。また、広大な土地やICTや歴史など別の生徒が主

張したことももちろん間違いではない。つまり、どれも正解であるため、生徒の思考で考えた時、ルールに則ったディベートではなく、ディベート的対話であったため、反論する必然性がなかった。生徒の思考をもっと具体的にイメージしたい。改めて、生徒の思考を大切にして、「本時のねらい、課題、評価（生徒の出口の意識）の一体化を図る」べきである。

4 研究内容のまとめと今後の方向性

地理的分野の全授業の9割は「事実に関する認識を獲得する授業」であるが、その9割の半分以上が、地理的な見方・考え方を育む授業、いわゆる「習得の授業」であることを確認した。地理的分野においては、地図帳、統計資料の使い方、雨温図、主題図、グラフの読み取り方など指導しきる。「どこで、何が、どのように、どれくらい。」に着目し、説明できる生徒を育てる。「習得の授業」を確実に実施する。

教師の教材研究により、生徒にとって魅力ある題材を設定し、「事実に関する認識を獲得する授業」の授業モデル（段階Ⅱ）で選択・判断を迫ったり、ディベートの授業をしたりするなど、「事実に関する認識を獲得する授業」だが、「価値に関する認識を形成する授業」につながる授業を引き続き積極的に実践していきたい。

「価値に関する認識を形成する授業」については、新たな単元で実施するというよりも、「南アメリカ州（開発と環境）」「地域の在り方」の単元で、「価値に関する認識を形成する授業」の授業モデルに基づいて確実に実践する。その上で、授業モデルをブラッシュアップしたり、誰もが実践しやすい具体例で示したりしたい。

5 おわりに

意欲的な授業研究委員の先生方と活発に意見を交わすことができたからこそ、「地理的分野として」「地理的な見方・考え方を強く意識して授業実践することが大切である」という基本を改めて強く感じた。この基本を外すことなく、次年度の実践につなげていきたい。

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学学習

歴史的分野長 本巣市立根尾学園 稲垣 直斗

1 はじめに

今年度の授業実践では、2つの授業ともに幕末を取り上げて下さったおかげで比較したり関連付けたりして授業を参観し、考えることができた。特に研究討議においては「歴史的分野における【価値に関する認識を形成する授業】はどうあるべきなのか」という視点を中心に、授業研究委員会で今後の研究の方向性を考えることができた。価値に関する認識を形成する授業についての実践が広まりつつある中で、改めて歴史的分野における実践について、何を大切にしていこうとよいかを具体的に先生方と話し合うことができたことに感謝の思いを伝えるとともに今年度の研究と次年度の方向性についてのまとめとします。

2 研究内容

(1) 「事実に関する認識を獲得する授業」

各時代相を見いだすことができる指導計画の工夫

…概念的知識をどう獲得させ、どのように時代の特色（時代相）を捉えるかを明らかにする。

認識を深めるための指導方法の工夫

…歴史的な見方・考え方を働かせて、認識を深める発問及び資料を吟味する。

(2) 価値に関する認識を形成する授業

事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化

…多面的・多角的に考察しながら、当時の人々の業績や願い、実現のための行動の過程、選択肢などに対する判断基準を吟味・評価する。

価値に関する認識を形成するための話合いの組織化

…相互の理解を踏まえたうえで、根拠や判断基準を比較・関連付けたり、構想（選択・判断）を行ったりしながら、意志決定を促す。

3 授業実践

授業実践1 岐阜市立岐北中学校 (10/23)

授業者：水端 俊 教諭

単元名：欧米の進出と日本の開国

【概要】井伊直弼の決断

「井伊直弼はなぜ勅許を得てから日米修好通商条約を結ぼうとしたのだろうか」という課題で、国内、国外の視点に基づいて、資料から井伊直弼の判断を追究した実践。授業の後半の深める場面では、井伊直弼の判断基準について反幕府勢力との比較から「日本を守る」という価値に迫って考え、終末では、井伊直弼の生き方から私たちは何を学べるのかを振り返った。【事実に関する認識を獲得する授業】と【価値に関する認識を獲得する授業】の接続の授業（価値に関する認識を形成する授業）

【授業実践1の考察】

(1) 「事実に関する認識を獲得する授業」

・認識を深めるための指導方法の工夫

○経緯を説明しながら丁寧な課題化を図り、生徒の言葉で課題を明確にした指導により、生徒は意欲的に追究活動を行った。また、ロイロノートを活用して、予想を交流するなど、生徒一人一人を大切に授業展開であった。特に全体交流の場面では、生徒の考えに対して、教師が適宜問い返しをすることで、事実認識を確かなものにする事ができた。

○一単位時間の中で、課題の生み出しから振り返りまでを位置付け、緻密に計算された授業構成であった。特に当時の人々の立場に立って、原因や背景を考えることができていて、生徒一人一人に歴史の学び方が身に付いていた。

(2) 価値に関する認識を形成する授業

・事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化

○終末場面の「井伊直弼の生き方からあなたは何を学んだのか（得たのか）」の問いによる振り返りは、歴史的事象を自分事として捉えるための手立てとして有効であった。

▲井伊直弼がどのような判断基準をもとに条約を結んだのか、井伊直弼と反幕府勢力の判断基準（価値）の押さえ方が弱かったように感じる。それぞれの判断基準の背景にある事実を押さえつつ、価値に迫り、さらに井伊直弼の判断における価値を分析する過程にもっと重きを置くと、価値に関する認識を形成する授業となる。

授業実践2 不破郡垂井町立不破中学校 (11/7)

授業者：伊藤 拓翔 教諭

単元名：欧米の進出と日本の開国

【概要】江戸幕府滅亡の要因

「何が江戸幕府を滅亡させたのだろうか」という課題で、これまでの学習をもとにキーワードを3つ用いて、滅亡の理由を考え、交流する授業。終末場面では、単元の振り返りを書き、単元を通して形成した事実認識を確かなものとした。【事実に関する認識を形成する授業】と【価値に関する認識を形成する授業】の接続の授業

【授業実践2の考察】

(1) 「事実に関する認識を獲得する授業」

・各時代相を見いだすことができる指導計画の工夫

○単元の終末場面における授業実践は実践例が少なく、貴重な実践となった。これまでの一単位時間の積み重ねがなければ成立しない授業で、事実認識が確か

なものであったからこそ、生徒一人一人が課題に向き合うことができた。

・認識を深めるための指導方法の工夫

▲深まりがなかった。キーワードで概念を書いている生徒、事実を書いている生徒がいて、キーワードを選ぶ視点がないので、話し合い場面における前提にずれが生じていた。キーワードも3つあることによって、キーワードを時系列に使い、江戸幕府滅亡の経緯の説明になってしまっていた。また、交流場面では教師と生徒との一対一のやり取りになってしまった。生徒一人一人はこれまでの学びを活かし、積み上げてきた知識を使いながら全員がまとめを書くことができていたからこそ、これらの考えを、全体交流で互いに学び合い、生徒同士で深めていけるような交流になる手立てが必要。

(2) 価値に関する認識を形成する授業

・事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化

○時代の転換期を取り上げることは、その時代の価値を色濃く表すものであり、複数の立場や事実から「江戸幕府の滅亡」の理由を追究することができていた。やはり価値に関する認識を形成する授業においては、時代の転換期や当時の人々にとって切実な課題となっていた事象を取り上げることで、生徒一人一人の認識が深まっていく。

▲江戸幕府の滅亡について、話し合う必然がないと、価値を認識するところまではいかない。当時の人々が江戸幕府の滅亡をどう捉えたのか、今の私たちの判断基準ではなく、当時の社会背景や人々の思いに迫ることで、江戸幕府滅亡についての価値が理解できる。当時の人々や社会がどのような基準で判断したのかを理解することが価値に関する認識を形成する授業では必要となる。

4 研究内容のまとめと来年度の研究の方向性

★前提として、研究の目的を再確認する

岐中社の掲げるテーマ「主体的に社会に参画する力」を育成するために、歴史的分野において、どのような授業実践していくのかを明確にしていく。

そのために…

①歴史的分野における事実に関する認識を獲得すると価値に関する認識を形成する授業の再確認

価値に関する認識を形成する授業では、過去の事象に立ち、現在の自分の価値観ではなく、その時代の課題が何であるかの理解や背景に立って考える。人物を通してだけでなく、社会の変化の様子を多面的・多角的に考え、その事象のもつ意味をその時代の中でどう捉えるかを考えていく。

②研究実践を絞って、毎年ブラッシュアップする

事実に関する認識を獲得する授業では、単元終末の各時代相を見出すことができる場面を実践。価値に関する認識を形成する授業（接続）では、当時の社会の判断が分かるような場面（開国か攘夷か）など人物の判断基準（価値）が表れるような題材を選び、何度も実践を繰り返す。

★事実に関する認識を形成する授業…従来通り

★事実に関する認識を獲得する授業と価値に関する認識を形成する接続の授業

→当時の社会的背景や人物の選択・判断した価値を理解する。（価値の分析過程）



★価値に関する認識を形成する授業→上記の授業を経たうえで、現代の自分の価値観と比べて、どう考えるかという自己の考え方に迫った手立てを講じた授業。



来年度の研究内容

(1) 「事実に関する認識を獲得する授業」

- ・各時代相を見いだすことができる指導計画の工夫→単元導入や単元終末の実践
- ・認識を深めるための指導方法の工夫
 - 歴史的な見方・考え方を深めるための手立て
 - その時代に立って考える指導の工夫

(2) 価値に関する認識を形成する授業

- ・事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化
 - 分析
- ・価値に関する認識を形成するための話し合いの組織化
 - 終末の手立て

5 おわりに

歴史的分野の研究では価値に関する認識を形成する授業とは何かという問いを立て実践してきました。今年度の実践を通して歴史的分野において大事なことは過去の社会的事象に対して過去の価値観（背景など）に立って考え、確かな事実認識を積み上げていくことではないかという考えに至りました。その事象のもつ意味をその時代の中でどう捉え、現代社会との類似点や相違点をどう考えるか。そして、その時代の課題が何であるのかを理解し、生徒自身の「選択・判断」「構想」の拠り所を歴史的経緯から形成し、これを積み重ねていくことが公民学習につながるのだと感じています。

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

公民的分野専門委員長 岐阜市立岐阜西中学校 前島久恵

1 はじめに

今年度の授業実践では、3名の先生方が「価値を形成する授業」の実践に取り組んでくださったおかげで、授業案の検討や授業研究会の際に、様々な意見を交流し合うことができ、大変有意義な時間をもつことができた。その際、「そもそも価値形成とは何なのか」「そのために取り上げる題材はどんなものがよいのか」「その題材をどのように取り上げるのがよいのか」「授業の流れ（授業構想）としてはどうすればよいのか」など、生徒に軸足を置き、生徒一人ひとりがもつ「価値」をよりよい流れで形成するための方法を検討できたことが何よりの成果だったと考える。授業実践してくださった先生方や、たくさんの意見やアイデアを出してくださった先生方に感謝の思いを込めて、今年度の研究と次年度の方向性についてまとめていく。

2 研究内容

【価値に関する認識を形成する授業】における重点

★授業モデルの定着・発展・普及

- ・価値に関する認識の授業を教科書から考える
- ・評価の充実
(ねらいの明確化とルーブリック評価等の活用)

★認識を深める場の手立ての在り方

- ・「留保条件の設定」による議論の成立（価値に関する話し合い）
- ・合理的な意志決定をさせるための「事実の分析的検討」

3 授業実践

授業実践1 (9/22)

授業者：本巣市立本巣中学校 今井 達彦 教諭
単元名：「これからの人権保障」

【概要】

「マイナンバーカードの取得は、義務化すべきか」という課題で、これまで学習してきた憲法上保証されている権利や、新しい権利として認められている自己決定権、プライバシーの権利など、私たちがもっている権利を踏まえた上で、マイナンバーカードを義務化すべきかについての価値の形成に挑戦した。

【授業実践1の考察】

○追究時の視点を明確にしたことで、生徒同士の議論が活発に行われた。

→「視点」の明確化は有効な手段である。

○視点によって立場を明らかにするように指導したことにより、生徒一人ひとりの価値の軽重が判断できていた。さらに、個人内でも賛成・反対の対立が起きており、さらに思考しようとする意欲につながっていた。

→個人内での対立（迷い）は、価値を形成していく上で大切な過程である。それを言い合える学級がよい。

○自分の立場を明確にする手段として、大きさや色の違う付箋を活用していた。（大きな付箋が賛成、小さな付箋が反対、色が視点）こうすることで、自分の立場を仲間にわかりやすく伝えることができ、意見交流の活発化につながった。

→付箋（ロイロノートなどでもよい）などで、視覚的にわかりやすくすることは大切なことである。

●根拠に乏しい意見があった。社会科として、「根拠」を明らかにした発言を求めている。

→「公民的分野だから、価値形成の授業」ではなく、あくまでも事実認識を重ねてきた上に成り立つのが価値形成の授業であることを再確認する。

授業実践2 (10/16)

授業者：可児市・御嵩町中学校組合立共和中学校
川野 優 教諭

単元名：「公共の福祉と国民の義務」

【概要】

「なぜ最高裁判所は、大阪国際空港の夜間飛行を認めたのだろうか」という課題で、個人の権利は保障されるばかりではなく、社会全体の利益（公共の福祉）によって制限されることがあるという事実認識の上に、どこまでが公共の福祉が適用され、どこまでが権利として認められるのかを問い、「留保条件」を考えることに挑戦した。

【授業実践2の考察】

○導入から展開、まとめに至るまでの流れが大変すばらしかった。特に導入で、飛行機の騒音を実際に聴かせることで、住民たちの訴えがいかに切実であったかを実感したのちに、最高裁判所が夜間飛行を認めたという事実を知った生徒たちが、感情豊かに思いを表現していたことが、のちの思考の場面で生きていた。

→課題化までの流れは、生徒の意欲につながる大切な場面である。

○「留保条件」を考える場面では、個人の権利と公共の福祉とを天秤にかけ、場面によってどちらを優先すべきか決まっていなかったからこそ、答えは一つではないし、じっくり考えていかなければならないことを改めて認識することができた。

→「折り合いをつける」の折り合いにも様々な方法があるからそこ、議論の重要性を再認識した。

●課題については、事前に授業研究委員で話し合っ
て決めたが、最高裁の判断を議論することが「公民」の形
成につながるのかは再考していきたい。

→現代社会を扱う公民的分野だからこそ、文言には細
心の注意をしていく必要がある。

授業実践3 (10/24)

授業者：多治見市立小泉中学校

若尾 一平 教諭

単元名：「平等権」

【概要】

「私たち小泉中学校の制服はなぜ変更されたのだろ
う」という課題で、様々な違いについて考えること
で、自由に選択できること＝平等ではなく、私たち一
人ひとりの見方・考え方が「平等」な社会を創ること
につながることに気付かせる授業に挑戦した。

【授業実践3の考察】

○自分たちの学校の制服が、一つ下の代から変更にな
ったという身近な変更焦点を当て、そこから平等と
は何かという一般化に繋げていくことができた。

→自分たち(中学生)に身近な事象を題材にすることで、
より自分事として考えるきっかけとなる。

○制服から入り、それ以外の様々な違いに目を向けさ
せたことで、視野を広げ、社会全体での「平等」とは何
かについて考えさせることにつながった。

●その反面、広げすぎたことでどれも一足飛びになっ
てしまったようにも思えた。

→一点突破から、一般化を図る流れが大切であることを
再確認できた。

●「選択できれば平等ではない」という共通の認識から、
ではどうなれば(どうすれば)平等と言えるのか、ここ
に一人ひとりの価値形成がうまれるのではないかと。

→「平等権」を考える際の価値形成は、差別はいけない
という表向きの考えではなく、もっと本質的な部分に
踏み込んでいくのも大切である。

4 研究内容のまとめと来年度の研究の方向性

3人の先生方の実践、そこでいただいた意見を元に、
来年度の方向性として…

(1) 授業モデルの提案

「価値を形成する」には、①個人内の価値形成、②集
団(班・学級)での合意形成の2ステップが必要となる。

『個人内の価値形成』

- 1 議論の設定…何が問題となっているのか。
- 2 視点の設定…どんな視点があるのか。
- 3 論点の整理・焦点化…誰のため、何のためにどうす
ればよいのか。何が特に大切なのか。(軽重)

4 立場の明確化…どの立場で考えるべきなのか。

→これらを理解していく中で、自分がそう考えるに至
った判断理由を明確にし、自分の考えの変容にも気
づかせるようにする。

5 相互理解を踏まえた意思表示

『集団(班・学級)での合意形成』

6 多数決・折り合い…より多くの人々が納得するた
めにはどんな方法があるのか

7 少数意見の尊重・留保条件…どんな条件があれば、
少数意見の人たちも納得できるのか

※集団での合意形成には多数決が採られるからこそ、
その多数決を意味のあるものにするために、「折り合
いをつけること」と「留保条件を考える」ことが欠か
せない。

(2) 価値認識を深めるための手立て

集団での合意形成を図る段階での、「折り合い」「留保
条件」について考える場を設定することで、個人の価値
形成から、自分以外の価値に目が行き、より多くの人
が納得するための解決策を考えることができる。どのよ
うな手立てをうつと生徒の思考に広がりや深まりがう
まれるのか、来年度研究を進めたい。

(3) 自己の変容を認識するための評価

自己の変容を認識するために、ルーブリック評価に
ついては来年度研究を進めたい。(以下、例)

	A	B	C
問題の解釈 (解決すべき課題がはっ きりしているか)			
解決策の実効性 (解決策によって課題が 解決できるか)			
解決策の正確性 (結論と根拠が明確であ るか)			

5 おわりに

今年度、公民的分野では3名の先生が授業実践の中
で、様々な「挑戦」をしてくださいました。そのおかげ
で、公民的分野で大切にしていきたい「価値を形成する
授業」の重要性を再確認し、その難しさ、奥深さも感じ
ました。と、同時に、その「おもしろさ」「魅力」も感
じました。来年度以降、より多くの先生方にこの「おも
しろさ」「魅力」が伝わってほしいと願います。多くの
先生方の挑戦により、様々な題材での価値形成の授業
モデルを確立していきたいと思っています。今年度は
ご協力いただきありがとうございました。

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

令和5年度 西濃地区中学校社会科研究会

1. はじめに

わたしたちはこれまで岐中社が築き上げてきた「事実に関する認識を獲得する授業」を基盤としながら、「価値に関する認識を形成する授業」の研究と実践に取り組んできた。

コロナ禍で、なかなか面と向かって人と話すことができない時期を経験したからこそ、志を同じくする多くの先生方と、うまくいかない悩みも含めて話し合うことが、理解を深め、何より私たち自身の力になると実感した。そして、西濃地区大会が次の研究につながることを期待して、本大会の振り返りをしたい。

2. 研究内容

【研究内容2】① 事実に関する認識を獲得する授業モデルの定着・発展

【研究内容2】② 価値に関する認識を形成する授業モデルの定着・発展

西濃地区大会では、特に「価値に関する認識を形成する授業モデル」に力を入れて研究を進めてきた。

3. 研究内容のまとめと今後の方向性

この数年で「価値に関する認識を形成する授業」についての理解が少しずつ広がり、「自分の学校でも挑戦してみよう」という思いに立って、実践し広げていただけた先生方の存在が何よりの成果である。

① 事実に関する認識を獲得する授業の一層の充実

「価値に関する認識を形成する授業」では、生徒たちが選択・判断(構想)する場面を大切にしている。しかし、そのためには豊かな知識内容が不可欠である。中学生の知識量には限りがあり、結果、根拠が明確ではないまま結論を導き出すこともあった。だからこそ、知識や概念等の習得は大切である。「事実に関する認識を獲得する授業」で確実に知識や概念等を習得していく、その積み重ねが「価値に関する認識を形成する授業」にもつながっていくことを改めて感じた。

② 単元構造図への位置づけ

価値に関する認識を形成する授業の大まかな流れは以下のようである。

I：今日的な現代社会の問題から、課題設定をする。

II：課題設定から、異なる見方や考え方を提示したり、考えたりする。その中で、自分がどんな未来を選択・判断していくとよいのか考える。

III：深める場では、それぞれの主張点を理解したり、論点を明確にしたりする。

IV：それぞれの主張は、どれも間違っていないことを踏まえて、最終的な意思決定をする。

価値に関する認識を形成する授業は、事実に関する認識を獲得した上でないと成り立たないため、基本的には単元の終末に設定される場合が多くなるものとする。そこで、単元のどこで、どのような力を身に付けたうえでの授業なのか、単元を見通した実践が不可欠である。

③ 分野の特質に応じた「価値に関する認識を形成する授業」の実践

【地理的分野】学習指導要領(P.71)には、次のように示されている。

(4) 地域の在り方

イ(ア)地域の在り方を、地域の結び付きや地域の変容、持続可能性などに着目し、そこで見られる地理的な課題について多面的・多角的に考察、構想し、表現すること

西濃地区大会で、サヘル地域の砂漠化という課題を解決するための具体的支援について話し合ったように、未来を時間軸で考える地域の在り方を中心に、研究を進めていく。

【歴史的分野】学習指導要領(P.118)には、次のように示されている。

(2) 現代の日本と世界

課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるように指導する。

(ウ)これまでの学習を踏まえ、歴史と私たちとのつながり、現在と未来の日本や世界の在り方について、課題意識をもって多面的・多角的に考察、構想し、表現すること

資料が比較的豊富にある近現代史において、価値判断の課題を設定していく。そうすることで、当事者意識をもって課題に向かい、多面的・多角的に施行しながら、先人たちの判断について、吟味・評価しやすいのではないかと考える。

【公民的分野】

これまで通り、①主体者としてかかわる今日的な課題を、②判断基準を明確化にして、話し合い、③相互の理解を踏まえた意思決定をしていくことで、価値に関する認識を深めていく。

価値に関する認識を形成する授業を実現していくためには、地理的分野と公民的分野でも、少しずつ実践もしくは、その要素を取り入れた実践をしていく必要がある。実践が最も難しいと考えられる歴史的分野においても、事実に関する認識を獲得する授業の中で、「判断基準を明確にする」経験を積んでいくことが大切である。例えば、時代の転換期で「価値に関する認識を形成する授業」の要素を取り入れることに可能性を感じている。当時の人物の願いに迫りながら、政策などについて分析・検討する、その繰り返しで未来のよりよい社会の在り方や自己の生き方を構想（選択・判断）していくことにもつながるのではないかと。

④価値の明確化と問いの精選

価値に関する認識を形成する授業においては、主張する考えの背景にある「価値」を明確にして授業を構成するとともに、生徒自身にも「価値」を自覚させることが大切である。

地理的分野では「今を救う支援（医療・食・水等）＝生命尊重」と「将来を見据えた支援（教育・技術支援等）＝自立」という大きく2つに分類し、「何を大切にしたい支援なのか」と問い返すことで、生徒に自己の主張の背景にある「価値」を自覚させていた。

事実に関する認識を獲得する授業でも、価値に関する認識を形成する授業でも、認識を深めていく際に、精選した問い返しをすることが大切である。

歴史的分野で「発展したと考えるのは誰？」と発問することで、視点を変えて考えを深めたり、公民的分野で「合併すべきだと考える人は、合併すべきではないと考える人の意見を踏まえて、どうすればいいと思いますか？」と発問することで、より深い話し合いにつながりやすくなることにつながった。

他にも、岐中社が提案する問い返しは有効であると考えられる。

- A という判断をしたのはなぜ？（判断理由の明確化）
- A と B で判断が分かれているけれど、論点は何かな？（論点の明確化）
- A と B の主張は、分かった？（相互の理解）
- A と B の主張はそれぞれ間違っていないけれど、A と B を比較したうえで、どうして A だと思ったの？（相互の理解を踏まえた判断）

⑤出口・評価の明確化

- ・事実に関する認識を獲得する授業では、どのような事実をどこまで深く追究させたいのか。
- ・価値に関する認識を形成する授業では、どのような課題を取り扱い、どの立場で、どの時間軸で選択・判断し、出口はどのようなものを設定しているのか。

特に、分野の特質にあった学びとして本当に必要かどうか、という視点で検証（指導と評価の一体化）していき、生徒たちの力をつけていくことが大切である。

4. おわりに

「価値に関する認識を形成する授業」を中心に研究を進めてきたが、その魅力を感じる一方で、その難しさも感じた。多くの先生方の挑戦により、難しさを感じさせる要因が薄れ、「やってみよう」と挑戦してくださる先生方が増えていくことを期待して本発表の振り返りとしていきたい。最後に、支えてくださった多くの先生方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

令和5年度 岐中社一般会計中間報告

令和6年1月22日

◇収入の部

1 会費（620円×448人）	277,760円
2 前年度から繰越金	1円
3 補助金	0円
4 雑収入（貯金利息）	0円
<hr/>	
収入合計	277,761円

◇支出の部

1 研究調査事業	
（1）旅費	143,900円
2 研究成果刊行事業	
（1）「社会科研究」印刷・製本費	133,861円
<hr/>	
支出合計	277,761円

◇差引残高

収入の部		支出の部		残高計
(277,761)	－	(277,761)	=	0 円

以上の通り報告いたします。

岐阜県中学校社会科研究会会長 吉田 秀慈

岐阜県中学校社会科研究会会計 箕浦 和宏

令和5年度 特別会計 予算案

令和6年1月18日

<収入の部>

		R5年度	(予算額)
1	前年度からの繰越金	2,788,736	2,788,736
2	印税収入(正進)*税務処理前	2,318,628	2,400,000
3	印税収入(東京法令)*税務処理	755,650	720,000
4	雑収入(利息含む)	12	19
	合計	5,863,026	5,908,755

<支出の部>

		R5年度	(予算額)
1	令和4年度分納税	108,500	401,000
2	研究助成金配分	505,646	400,000
3	旅費	1,375,123	820,000
4	全国大会、理事長会含む 会議費	18,617	25,000
5	通信・運搬費	1,930	25,000
6	研究事業費	425,000	500,000
7	「社会科研究64号」印刷・製本費 一般会計より支払い分		350,000
8	全中社年会費		15,000
9	消耗品費	69,869	400,000 (通信契約)
10	委託費	106,150	105,600
11	県大会準備費(西濃大会)	100,000	80,000
12	役務費		5,500
13	予備費	550	20,000
14	年会費 通信契約	330,836	
15	備品購入 合計	410,740 3,452,961	3,147,100

以上の通り報告いたします

岐阜県中学校社会科研究部会長

吉田 秀慈 印影省略

岐阜県中学校社会科研究部特別会計

野原 克洋 印影省略

お知らせ

(1) 社会科研究65号について

*各郡市の先生方に配布してください。

(2) 資料集等の選定に関わって

*「岐阜県」版掲載資料集…岐阜県中学校社会科研究会編集

◇地理的分野資料集「ビジュアル地理」…東京法令出版

◇公民的分野資料集「ビジュアル公民」…東京法令出版

◇歴史的分野資料集「歴史の資料」…正進社

(3) 代議員と授業研究委員の選出について

代議員、各郡市1名 授業研究委員、各郡市1名（以上）

*授業研究委員については、希望者があれば2人以上でも結構です。

【注意事項】

選出に際しては、所属長（所属先の校長先生）に必ず相談の上、決定してください。代議員については年間2回（5月、2月）、授業研究委員については年間4～5回（全体会6月、8月、12月＋分野別研究会9月～12月）所属先の学校を離れ、岐中社の会議に参加していただくこととなります。「ご本人の承諾のみ」で決定されないよう、各郡市の部員の皆様にくれぐれもご確認ください。

【お願い】

前年度の代議員（皆様）の方が責任をもって、4月19日（金）までに新代議員と新授業研究委員を報告してください。もし、決定できない場合は決定までの見通し（いつまでに、どの場で決定するのか）をご連絡ください。第1回代議員会は、5月下旬に開催を予定しています。新代議員になられた方には、代議員会への参加について、ご承知おきいただくようお願いいたします。

報告に際しては添付の書式にて「電子メール」または「FAX」で北陵中学校の内海までお願いします。

4月19日（金）までに報告がない郡市につきましては、本年度の代議員の方に令和6年度第1回代議員会の案内状（派遣依頼）をお送りしますので、新規の代議員の方に確実にお渡しさせていただきますよう、お願いいたします。

第56回 全国中学校社会科教育研究大会 栃木大会 参加報告書

主務 多治見市立北陵中学校 内海 照幸

1 大会名

第56回全国中学校社会科教育研究大会(栃木大会)

2 研究主題

「社会を見つめ、社会と関わる力を育む社会科学習の創造」

3 期日

令和5年11月9日(木)・10日(金)

4 会場

ライトキューブ宇都宮

5 日程

1日目	11月9日[木]	12:30	13:00	13:40	14:10	14:20	15:50	16:00	16:20	16:50	17:00	17:30
【会場】	ライトキューブ宇都宮	【受付】	【開会行事】	【基調提案】	【休憩】	【記念講演】	【閉会行事】	【移動】	【常任理事会】	【休憩】	【理事会】	
	宇都宮市宮みらい1-20	(30)	(40)	(30)		(90)	(10)		(30)		(30)	
	Tel: 028-611-5522											

【記念講演】

「LRTで拓く交通未来都市うつのみや」

宇都宮ライトレール株式会社常務取締役 中尾 正俊 氏



2日目	11月10日[金]	8:30	9:10	9:30	9:45	10:35	11:00	11:50	13:00	14:10	14:40	14:50	15:20	16:20	16:30
【受付】	【分野別提案】	【移動】	【授業I】	【休憩】	【授業II】	【昼食】	【研究協議I・II】	【指導助言】	【休憩】	【研究発表】	【講師講評】	【閉会行事】			
(40)	(20)		(50)		(50)	(70)	(70)	(30)		(30)	(60)	(10)			

6 基調提案

□ 研究主題設定の理由

1 予測困難な時代を生きる力とは?～社会と人生について洞察し続ける力～

これからの社会は、変化が激しく、これまで以上に予測困難な時代と言われている。この時代を生きるためには、様々な価値観を尊重したうえで、問題解決の最適解を得なければならない。そのため、何がよりよいかを常に意識し続ける態度が必須である。このことから栃中社では、「よりよい社会とは何か」を問い続けられる生徒を育成したいと考えている。そしてこの問いは、突き詰めると、よりよい社会の構成員としての「よりよい人生とは何か」を自問し続けることにつながる。これは中学校社会科の目標である「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」の育成と軌を一にするものである。また、現在は、身近に様々な情報が氾濫している。だからこそ、適切に情報を読み取ることが一層求められている。こうした時代にあって、批判的思考(クリティカルシンキング)が必要である。栃中社では、批判的思考を「情報をただ鵜呑みにするのではなく、その情報を精査して自分なりの考えをもつこと」ととらえている。

批判的思考は、その能力やスキル(=認知的側面)をもっていただけでは十分に発揮されず、使おうとする態度も必要である。この情緒的側面を批判的思考態度といい、4つの因子(探究心、客観的判断、多様性の許容、証拠の重視)から成る。批判的思考のみならず批判的思考態度も育成することが、よりよい社会と人生を切り拓く上で必要であると考えられる。

2 研究主題について

(1) 研究主題の定義～「社会を見つめ、社会と関わる力」とは何か？

以上のように、学習指導要領や本県中学生の実態を踏まえ、予測困難な未来を生きる力のうち社会科が担うものとして、栃中社研では「社会を見つめ、社会と関わる力」という研究主題を設定した。つまり、「日常生活でも、事実やより確かな情報に基づいて、社会的な見方・考え方を働かせて思考することで、よりよい人生や社会を創ろうとする力」である。そして、この力は「よりよい社会とは何か。」「よりよい人生とは何か」を将来にわたって自問し続ける基礎となるものである。

(2) 社会を見つめるとは？～様々な人々の思いや情報の存在に気付き共感的にとらえる～

社会的事象には、人の思いや営み、理念が内包されている。一見、見えづらいこうした存在に気付き、肉薄し、社会的事象をできるだけ共感的にとらえてほしいという願いを込めて、「(人の思いを)見つめる」と表現した。さらに、一人の人の思いや営みが社会的事象のすべてを表しているとは限らない。複数の人の思いや営みを共感的にとらえることで、社会的事象の本質に近づいてほしいと願っている。また、誤った情報を含め、情報の氾濫する社会にあって、情報を鵜呑みにしたり、恣意的な情報に惑わされたりせず、社会的事象を的確にとらえてほしい。さらに、複数の証拠に基づいて結論を導くという批判的思考のプロセスを用いて、社会的事象を考察してほしいという願いも込めて、「(情報を)見つめる」と表現した。

(3) 社会に関わるとは？～生涯を通じて問い続ける～

様々な立場の人の思いを見つめたり、複数の情報を見つめたりしたその先にこそ、「よりよい社会とは何か」「よりよい人生とは何か」という問いにたどりつくのではないだろうかと考えている。「社会に関わる」というと、例えば、身近な地域の課題の解決策を地方公共団体に提案することが考えられるが、栃中社研の考える「社会に関わる」は、それだけではない。社会科で扱う事象やよりよい社会や人生について問い続け、模索し続けることも含まれている。社会的な見方・考え方を働かせ「なぜそうなったのか」「それにはどのような意味や意義があるのか」等を問い、「そこはどのような地域となるべきなのか(地理的分野)」「どのようなことが必要とされているのか(歴史的分野)」「私はどのようなことができるか(公民的分野)」等を、生涯にわたり構想し続ける。このことは、近い将来、社会に参画することにつながるのではないか。

3 授業づくりの視点～どうすれば、社会を見つめ、社会と関わる力が身につくのか～

(1) 視点1: 批判的思考の育成～「問う」×「考える」～

ある事象に対して、社会的な見方・考え方を働かせて疑問を抱き、思考する。この授業の積み重ねが、日常生活でも批判的思考を働かせることにつながると考える。具体策をいくつか挙げる。

i ある情報に対して疑問をもつ～見方・考え方を働かせる問いで、思考が活性化する～

問いを立てることは批判的思考の根本的要素であり、批判的に考えるための第一歩である。問いを発することは、ある考えを無批判に受け入れるのではなく、より深く考え、適切に理解するきっかけとなるからである。

例えば、中学2年生の歴史的分野「江戸時代の産業の発達と町人文化」で、日光街道を扱った授業。「(宇都宮市の清住通りをストリートビューで見せながら)君たちの住んでいる家と比べて、何か違いはあるのか？」と問う。比較という小学校社会科から培っている社会的事象の見方・考え方を働かせる問いである。生徒は、間口が狭いことに気付き、「なぜ間口の狭い家が多くあるの？」と問いが喚起される。それに対して、他の生徒が既習した地理的分野の近畿地方と関連させ「もしかして京都と同じなのでは？」とつぶやく。間口の狭さと奥行き長さから、日光道中と奥州道中の分岐に位置する宇都宮の当時の商業が盛んだった様子を推察することができる事例である。

ii 社会的事象に対する自らの考えを記録し続ける～自らの成長を実感しさらに促す～

社会的な見方・考え方を働かせて考察、構想した自らや他者の考えを記録し続ける機会を多く設定する。生徒は、過去の自分の動化と比較することで、自らの現在の成長を実感できる。さらには仲間の考えを知ることで、自分の

考えを相対化し、考えを深めたり広めたりできる。自らの思考を記録し、振り返りの際に活用して、成長を実感することは、主体的に学習に取り組む態度の育成につながり、批判的思考の向上につながる。具体的には、単元を貫く問いを生徒と共に設定する。単元の最初に、その課題に対する自分なりの見通しをもつ。単元の途中で適宜、見通しの吟味や再検討を行う。生徒は授業を終えるたびに、単元を貫く問いの解決を図る。過去の自分や仲間の意見を見比べることで、単元末の考察は、以前より深まりのある考察になるはずである。

iii 情報を鵜呑みにせず、情報を精査して、自分の考えをもつ～当たり前を疑う～

情報があふれる社会において、今まで以上に「よりよい社会とは何か」「よりよい人生とは何か」を問い続ける態度が求められている。そのためには、社会的事象を理解した上で、どこまでの批判的思考を求めるのかという議論もある。しかし、情報源の信頼性を自分が集めた資料を基に判断する「推論の土台の検討」や、複数の根拠から情報の信頼性を高める「推論」を、意欲的に実践していきたい。

例えば、中学1年生の歴史的分野「古代までの日本」において、室町時代に描かれた『清水寺縁起』から、蝦夷と呼ばれた人々の様子をとらえる授業。生徒は彼らを見て「怖い。鬼みたい。悪者っぽい。」と感想を述べる。教師が「本当に鬼のような顔をしているのか？」と問うと、生徒は「わからない」と答える。その後、『アイヌ民族：歴史と現在』（公益財団法人アイヌ民族文化財団）から、アイヌの人々の生活を学び、「怖い」や「鬼のような顔」というイメージは払しょくされていく。ここで教師が「なぜ、鬼のように描かれたのか」と問う。朝廷の支配地域側とアイヌ民族に寄り添った側では、描かれ方が異なることに気付かせたい。このように「推論の土台の検討」や「推論」を経験させることで、情報を鵜呑みにせず、情報を精査することで、社会的事象を的確にとらえる態度を養わせていきたい。

(2) 視点2: 批判的思考の育成～探求心を高める資料と授業展開～

批判的思考態度は、「論理的思考への自覚」「探求心」「客観性」「証拠の重視」の4つから成るが、その育成には、「物事の真理を追い求める探求心を他の態度に先立って高める必要がある」その具体策を列挙する。

i 心的距離の近い教材を発見、開発する～生徒と社会的事象を人をつなげる～

社会科で扱う事象には、必ず人が存在する。社会的事象に内包された人々の思いや営み見つけ、肉薄することを契機として関わってほしい。そのためには、思いや営みを感じられる教材、つまり生徒にとってできるだけ心的距離の近い教材を発見、開発したい。地域教材や現物史料を扱うということではない。生徒にとって、可能な限り、リアルに人の息吹を感じられる教材である。

例えば、中学1年生の歴史的分野「中世の日本」において、『一遍聖絵』から鎌倉仏教が民衆の心を捉えていく姿を読み取る授業。史料には、やぐらの上で足を踏み鳴らしている僧を一目見ようと、身分を問わず老若男女が集まっている姿が描かれている。それを見て生徒が「アイドルのコンサートみたい」と発言した。教科書には「民衆の心をとらえてきました」という文言が書かれているが、史料が呼び水となり、実際に行ったアイドルコンサートを思い出し、その熱量まで想起することができた。

ii ICT(特に、ビデオ会議サービス)を活用する～心的距離を縮める～

Google Meetなどのビデオ会議サービスを使えば、教室にいながらにして、世界中の人にインタビューができる。教材に対して心的距離を一気に縮めることができる。例えば、九州地方(中学2年生の地理的分野)の授業で、桜島周辺に住んでいる人から直接インタビューを行った。生徒が一番興味をもったのは、鹿児島県の天気予報には「桜島上空の風向き」が表示されたり、灰が室内に入らないよう夏でも窓を閉めたりするといった話であった。

教科書には載っていない生活に密着した話を聞いたのは、そこに人が確かに存在することをリアルに実感でき、「社会を見つめ、社会と関わる力」の育成に効果的だった。

他にも、ビデオ会議サービスを使用した次のような授業が考えられる。地理なら、北方領土の解決に向けて考えることの意義を見出せない生徒に対して、かつてそこに居住していた人のインタビューを聞かせる。居住していた場を喪失することとは、どういうことなのかを、人を介して生徒はリアルに気付かされると思う。歴史的分野であれば、多くの生徒にとって馴染みが薄くであろう伝統文化の継承者に、インタビューを試みる。

受け継がれてきた伝統を絶やさず、未来につなげることの重みに気づかされると思う。また、ビデオ会議サービス以外にもデジタルミュージアムなどのインターネット上の一次史料を教材として活用することも考えられる。

iii ゆさぶりをかける～獲得した知識を一度砕き、学習への動機を喚起する～

解決に値する問いを生むために、ゆさぶりをかけるという手立てがある。ゆさぶりの説明と効果について、「生徒が、生活経験やマスコミ情報、社会科学習で獲得した、社会的事象を説明する知識は不完全なものである。そこで、この知識では説明できない社会的事象を提示する(=生徒の既得の知識にゆさぶりをかける)。これまでに獲得した知識を一度打ち砕くのである。これによって生徒は学び直しの必要を感じる。つまり学習に対する動機が生まれる。一方、新たに獲得した知識は、以前より深まりのある知識となる。」事実を迫る最短の知識や思考は一面的であり、探求心が高まらない。生徒の実態を踏まえ、適切にゆさぶりをかける。事実を迫る試行錯誤の過程そのものが探求心を高め、また、「粘り強い取組を行おうとする側面」「自らの学習を調整しようとしている側面」を育てると考えている。

4 評価～研究主題と観点別評価との関連～

(1) 知識・技能～思考力、判断力、表現力等の基となる、生きて働く知識の獲得～

社会を見つめ、社会と関わる力は、個々の知識・技能をより強く結び付けるものである。これは事実的で個別的な知識のみを習得させることではない。それらをより強固につなげ、概念的で構造的な知識をつくるのに有益である。また思考・判断・表現の質は、知識・技能の質によって左右されるので、社会を見つめ、社会と関わる力は、生きて働く知識より強く獲得することにつながる。

(2) 思考・判断・表現～「人の願い」と「情報」を見つめる～

社会を見つめ、社会と関わる力は、自らの思考を対比し、自分でない誰かの立場に立って思考する契機となる。「A→B(原因、結果)」「A≠B(類似)」などと客観的に考えることは大切である。しかしそこには確かに人が存在した(している)のである。栃中社研の考える社会科は、社会そして人間について洞察をし続ける教科である。「Aにより止むを得ずBに至ってしまった」「Aの解決にはBしか拠り所が無かった」といった、人々の思いがそこには存在していた(いる)はずである。「社会を見つめ、社会と関わる力」により、事象の中にいる人間それぞれを見つめることを怠らず、社会的事象を追究することは、多面的・多角的に思考する契機になるのではないだろうか。

(3) 主体的に学習に取り組む態度～問いと答の間の長い距離を自ら歩きながら成長する～

社会を見つめ、社会と関わる力は、主体的に学習に取り組む態度を促すものである。主体的に学習に取り組む態度には、「粘り強い取組を行おうとする側面」「自らの学習を調整しようとしている側面」の2つがある。

東海・北陸ブロック 北方領土問題教育者会議のまとめ

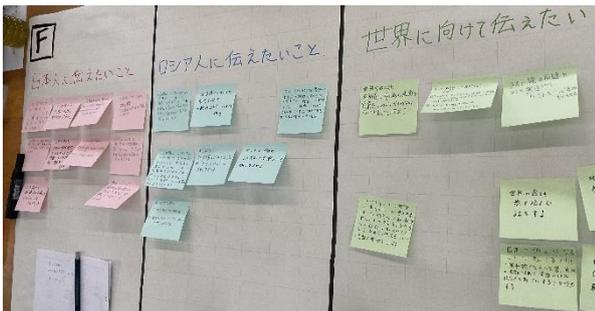
岐中社 研究委員長 古田伸二

1 北方領土問題教育者会議の参加を通して

北方領土問題教育者会議に参加して、国や北方領土対策協会などが多数の啓発事業と努力を重ねていることを実感した。日本は、北方領土の返還を、①「外国人が定住した事実が無いこと」などの歴史的事実と、②「我が国固有の領土である北方領土」という国際法という2つの根拠に基づき要求している(内閣府北方対策本部より)。このような視点で、北方領土問題に対する情熱と、運動展開、返還運動団体やわたしたち、児童生徒も含む横のつながりが大切だと理解できた。

北方領土問題の国民世論調査では、「北方領土をロシアが法的な根拠なく占拠し続けている現状について知っているか」の問いに「よく知っている」「ある程度知っている」と回答した人は、18歳～29歳で55.1%→60歳～69歳で69.6%と、年齢が若くなるにつれて関心が低くなる傾向があった。関心が低いことを解決するために、「広報啓発活動の情報提供」と「教育現場での北方領土問題についての見方・考え方や基礎知識や豊かにして行くこと」が大切だと感じている。

本会議では、他県の先生方から取組状況を聞いた。学校の授業では、単位時間で行うが、主権者教育の枠組みの中で横のつながりを大切にした実践を重ねていくとよい、という意見が印象的だった。また、各県の生徒同士の交流会を行った。岐阜県では、代表校として、養老町立高田中学校の生徒が交流会に参加し、北方領土問題について「日本人やロシア人に伝えたいこと」を視点を、何をどのように啓発していくと、身近なものとして関わることができるのかを議論したり、発信したりできた。



養老町立高田中学校と他県の生徒との交流



2 日程

令和5年7月27日(木)

会場：静岡県立朝霧野外活動センター

12:00

JR新幹線 新富士駅集合 会場までバスで移動

13:30～14:45

合同開会式(関係者会議と合同実施)

・あいさつ

・内閣府、(独)北方領土問題対策協会からの報告

15:00～16:30

東海・北陸ブロック北方領土問題教育者会議

・各県の取組報告及び学校における実践報告等

(※会議終了後、「北方領土を考える東海・北陸中学生のつどい」を見学した。)

令和5年7月28日(金)

9:00

宿泊先発

9:30～11:00

研修視察

・富士山世界遺産センター

・富士宮浅間神社

11:30～12:30

昼食(富士市内)→解散

3 令和5年度の活動実績 令和5年12月13日現在

- 第1回教育者会議運営委員会（4月27日）
 - ・令和5年度活動方針及び事業計画の立案・決定
- 第1回教育者会議（6月8日）
 - ・令和5年度活動方針及び事業計画，予算案の承認
 - ・北方領土問題関係諸事業への協力，参加者等について決定
- 北方領土問題教育指導者東海・北陸ブロック地域研修会
北方領土問題地域青少年育成事業（北方領土を考える東海・北陸中学生のつどい）
（7月27日，7月28日）
- 第2回教育者会議運営委員会（1月22日予定）
 - ・令和5年度事業報告案等の決定
- 第2回教育者代議員会議（2月20日予定）
 - ・令和5年度事業報告及び研究実践のまとめ
 - ・北方領土関連事業参加者の研修報告
- 北方領土に関する全国スピーチコンテスト最終選考会審査員（2月24日予定）
- 令和5年度（第17回）北方領土問題教育者会議全国会議（2月25日予定）

【課題・問題点】

- ・北方領土問題についての見方・考え方や基礎知識を豊かにしていくために，解決に向けての取組について，小・中の児童生徒の発達段階や指導の系統性を踏まえた，学習内容を充実させる必要がある。主権者教育の枠組みで行うなど，横断的な教育の実践を重ねていくとよいと考えています。
- ・学習指導要領に基づく領土教育について，まずは教師が理解し，持続可能性を見いだせる学習展開を工夫する必要がある。岐中社で授業展開の実践を交流していくのはどうか。
- ・各校が，指導計画に基づいて適切な領土教育の推進が図られていくように，岐阜県中学校社会科部会で具体的な事例を示しながら各郡市の中学校に啓発を図るとよい。
- ・予測困難な現代の世界情勢を踏まえた領土教育の在り方について，具体的な実践に挑戦するとともに，深い学びの実現に向けて議論する必要がある。まずは，深い理解を求めていく。

【今後の予定】

- ・北方領土関連事業への参加者からの研修報告を基に，どのように授業実践に生かしていくのかを考える。その際，生徒が日本国民として自分事として捉え，未来の平和のあり方やよりよい社会のあり方を深く考えられるように実践交流会を行う。同じ学校規模だけでなく，郡市内にSNS等を利用して発信していくのも方法の一つかと考えています。
 - ・国土学習推進委員会を中心に，北方領土問題に関わる授業の実践研究を地理的・歴史的・公民的分野の三分野の接続を意図して考え，一層充実させる。1年生～3年生までの学習内容を含めた系統的な指導であるが，国際的な問題であるため，自分事として捉えることは難しい。教科書の学習を土台として，歴史や現状，国の動きを知るだけでなく，ICTを効果的に活用して，コンテンツ（独立行政法人北方領土問題対策協会や政府広報オンライン）を活用したり，元島民の願いを聞いたりすることもできる。
- 生徒の興味・感心を引き出すとともに，対話活動により，深い学びを実現させていく。

令和5年度 北方領土問題教育指導者現地研修会報告書

岐阜市立陽南中学校 今津 伸也

1. 主な研修内容

1日目 移動日

2日目 納沙布岬から北方領土を視察 元島民の体験談 鈴木 咲子 氏 (択捉島出身)

北方館の館長さんや元島民の鈴木さんの熱のこもった語りは、事前に北方領土について知識として持っている教員の私にも、「元島民の方や北海道の人々だけの問題ということではなく、日本国民すべての問題である」と改めて感じる事ができた。社会科の教員として、「日本は島国だから海上に国境があり、大陸に比べて国境線を国民が意識しにくい」と授業を行ってきた。しかし、今回北方領土を自分の目で見たことによって「見えるのに行けない国土」「国際法上存在しないはずの他国との境」があることを確認できた。一人の主権者として私もこの問題に関わらないといけないと決意することができた。そして私が抱いたこの感情は、納沙布岬からの景色を見れば、だれしも同じように抱いてくれると確信する。



3日目 北方領土授業構成案づくり及び構成案の発表

2日目の午後から、北方四島交流センターにて、各分野に分かれて、授業構成案づくりを行った。私たちは、歴史的分野を担当し「戦後日本の出発」の導入の授業の構成案づくりを行った。東京都の先生と交流する中で、都民会議作成の「北方領土の返還を求める」という独自資料を頂いた。小中学生にも理解しやすいように、図や写真を中心とした資料の構成となっている。そして、戦前は1万7000人もの人々が北方領土に居住していたのに、現在の居住者は0人であるという図を導入の資料として扱うこととなった。3日目の発表では、各分野の構成案の発表が行われた。それぞれの発表を聞きながら、各分野で北方領土に関する認識を積み上げていくことで、生徒が将来一人の主権者として主体的にこの問題に対して行動できる土台になると感じた。



2. 研修を通して

「北方領土は見えるけど、行くことができない領土である」ことは、自分の目で見ないと実感を得られ難い。そうした中で生徒が自分の問題として実感しにくい北方領土問題を、主権者として自分たちの問題として認識できるようにすることが、教師の役割だと考える。

また、現在進行中の問題を考えることで、情報化やグローバル化が進み予測が困難な将来の中、よりよい社会をつかっていくために必要な生徒の知識力や思考力、そして主体的に行動する力を育むことにもつながる。それらの力が養われるにつれ、北方領土問題を自分ごとと捉える主権者が増え、国際法にのっとり平和的に領土問題について解決しようとしていく国民が増えていくはずだ。

今回の研修会で北海道の道東地区の先生が提案された、「生徒が一人の主権者として北方領土問題とどう関わっていくべきかを3年間で段階的に知識を身に付けた上で、この問題について考えさせていくこと」が大切だと感じた。私は中学校の社会科の教員として、全ての学年で領土問題を扱う。本研修での体験を生徒に語ることはもちろんだが、生徒一人ひとりが主権者として北方領土問題について主体的に取り組めるように授業を仕組んでいきたいと決意した。

各支部報告

岐阜市支部

内田 武志

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回校外研修
3ブロックに分けての研究授業・授業研究会
8月：第2回校外研修
関ヶ原古戦場記念館見学
10月：第3回校外研修
8ブロックに分けて小中合同の研究授業・授業研究会

◆本年度のまとめ

授業研究会では、「価値判断」や「単元の終末」に関する実践を通して、時代背景、地域的特色に既習の学習内容を根拠に思考する姿があった。小中合同の研究会では、発達段階に応じた授業の在り方について学び合った。

羽島市支部

後藤 理沙

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会
授業者：中島中学校 堀田 恭平 教諭
2年歴史 「近代の日本」
11月：第2回研究会
授業者：竹鼻中学校 大竹 智也 教諭
3年公民「現代の民主政治」

◆本年度のまとめ

単元全体を通じて社会の形成に参画する力を育成するために、単位時間の役割を明確にした単元指導計画を作成した。また、価値に関する認識を形成する授業モデルを導入し、既習事項と関連付けながら、小集団交流を積極的に活用した授業について学びあうことができた。

各務原市支部

坂井 浩

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会
授業者：稲羽中学校 井上 忠 教諭
1年地理「世界のさまざまな地域」
8月：第2回研究会
徳山ダムと関連施設の見学会
11月：第3回研究会
各務原市公表会発表校、社会科部会に参加

◆本年度のまとめ

ロイロノートのシンキングツールをうまく活用して調べ学習を効率よく進める姿があった。活発な話し合いから学び合いに移るようになるための小集団交流の目的や方法について研究討議を進めることができた。

山県市支部

佐野 敦

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会
授業者：高富中学校 曾我 幸正 教諭
3年歴史「冷戦と日本の発展」
12月：第2回研究会
授業者：伊自良南小学校 白戸 由希乃 教諭
6年歴史「明治の国づくりを進めた人々」

◆本年度のまとめ

ロイロノートの思考ツールや共有機能など、生徒の思考を視覚化したり、深めたりするためのICTの効果的な活用について積極的に学び合うことができた。また、考えの変容や学ぶ喜びを、生徒にどのように実感させるかという視点においても研究を進めた。

瑞穂市支部

森 寛人

◆テーマ

よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：生津小学校 山口 雄大 教諭
6年歴史「縄文のむらから古墳のくにへ」

11月：第2回研究会

授業者：穂積中学校 村瀬 雄也 教諭
2年地理「近畿地方 - 都市・農村の変化と人々の暮らし -」

◆本年度のまとめ

分かる楽しさやできた喜びを実感させるため、児童・生徒にとっての交流の在り方や仲間と自分の意見を比較しやすくするためのICT機器の活用などについて、積極的に学び合うことができた。

本巣・北方支部

野中 隆弘

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学学習

◆本年度の活動内容

11月：第2回研究会

授業者：北学園 松原 亨介 教諭
9年（中3）公民「私たちの暮らしと経済」

◆本年度のまとめ

対話的な学びを通して、社会的な見方・考え方を深めようとすることに焦点をあて研究を進めた。児童・生徒の生活経験との関わりをもたせた課題化の流れや、課題追求のための資料の精選、進んで話し合ったり、本時活用すべき語句を使ったりするための言葉かけがどうあるべきなのかについて、学び合うことができた。

羽島郡支部

杉山 善朗

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学学習

◆本年度の活動内容

4月：研究テーマ、研究組織、研究計画の検討

6月：研究授業（中学1年生）

授業者：笠松中学校 伊藤 耕太郎 教諭
「急速に成長する南アジア」

11月：研究授業（小学6年生）

授業者：北小学校 矢島 徳宗 教諭
「明治の国づくりを進めた人々」

◆本年度のまとめ

生徒が見通しをもって授業課題に取り組むための導入の在り方や、ICT機器を活用した資料提示の工夫について研究を進めた。また、p4cを活用し、子どもたちが主体的に学ぶための手立てについて学び合った。

大垣市支部

黒川 真一

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：大垣市立南中学校 若園 晃治教諭
3年歴史「第二次世界大戦と日本」

10月：第2回研究会

授業者：大垣市立興文中学校 三輪 大輔教諭
2年歴史「明治維新」

◆本年度のまとめ

歴史的分野における、「価値に関する認識を形成する授業モデル」の割合は少ないことを理解した上で、「価値に関する認識を形成する授業モデル」の要素を取り入れた「事実に関する認識を獲得する授業モデル」の実践に取り組んだ。確かな「事実に関する認識」を単元内で獲得する必要性や、自分の考えを再構築させる場の設定など、授業を展開していく中での必要な要素について考え、学び合うことができた。

海津市支部

曾根 章

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：日新中学校 青木 悠馬 教諭
2年地理「日本のエネルギーのあらまし」

10月：第2回研究会 小中合同開催（中担当）

授業者：平田中学校 曾根 章 教諭
2年歴史「明治維新」

◆本年度のまとめ

6月：終末の選択判断を迫る際は、正解は一つでないため、2択だけではなく、様々な選択があってもよいのではないかという意見があった。11月：小社研との合同開催であったため、研究内容について用いる言葉の解釈を付けた方が、より分かりやすい主張になるのではないかという意見があった。今後、より分かりやすいような研究内容を主張していくようにしたい。

養老郡支部

柳瀬 陽一

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

4月：第1回教科研究会

研究組織・研究内容の検討

6月：第2回教科研究会

授業者：養老小学校 市川 園子 教諭
5年「あたたかい土地の暮らし」

11月：第3回教科研究会

授業者：高田中学校 近藤 郁弥 教諭
3年公民「国の政治の仕組み」

◆本年度のまとめ

授業展開の中で、生徒は自分の経験を生かし、立場や考えの根拠を明確にして意見を話すことができた。全員が納得できる話し合いにするために、合意できる課題設定や必然性のある話し合いの仕方となるよう工夫していきたい。

不破郡支部

高畑 勇介

◆テーマ

よりよい社会の実現をめざす子が育つ社会科学習～「不破の子」が社会とつながる授業を通して～

◆本年度の活動内容

6月：第3回研究会

授業者：垂井東小学校 八代 優輝 教諭
4年社会「ごみの処理と再利用」

11月：第5回研究会

授業者：不破中学校 伊藤 拓翔 教諭
2年歴史「欧米の進出と開国」

◆本年度のまとめ

単元や単位時間の指導を通して、主体的に社会の形成に参画する力を育てることに焦点をあて、小中合同で研究を進めた。目標—指導—評価の一体化を図ることや、価値に関する認識を深める授業では、相互の立場を理解し、折り合いをつけることが大切ということ、積極的に学び合うことができた。

安八郡支部

浅野 秀文

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

5月：研究テーマ、組織、年間計画の検討

6月：第1回研究会

授業者：輪之内中学校 若原 崇史 教諭
1年歴史「古代国家の歩みと東アジア世界」

11月：第2回研究会

授業者：神戸中学校 新井 拓海 教諭
3年公民「地方自治と私たち」

◆本年度のまとめ

深めの発問で「価値に関する認識」を問うことで、生徒の思考をゆさぶり、既習事項と本時学習した内容を踏まえて、自分の考えを再構築することができた。また、意図的な小集団をつくって交流活動を仕組むことで、建設的な意見の集約を図り、意味のある話し合いにすることができた。

揖斐郡支部

國枝 絹太郎

◆テーマ

対話的で深い学びを基盤にして、主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科指導

◆本年度の活動内容

6月：指導案検討

10月：授業研究会

(岐中社県大会西濃地区大会と兼ねて実施)

授業者：大野中学校 竹中 智洋 教諭

1年地理「アフリカ州—国際的な支援からの自立に向けて—」

◆本年度のまとめ

価値に関する認識を形成する授業についての研究をさらに進めた。生徒に付けさせたい力を明確にした単元指導計画の大切さや「事実に関する認識」に基づき「価値に関する認識」を形成していくことができる追究活動のあり方を学び合うことができた。

関市支部

亀井 悠介

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：旭ヶ丘中学校 嶋津 敦子 教諭

3年歴史「新たな時代の日本と世界」

10月：第2回研究会

授業者：下有知中学校 後藤 浩志 教諭

3年公民「生産と労働」

◆本年度のまとめ

単元構造図の工夫し、単位時間ごとにどの視点が当てはまるのか明確にすることで、生徒が見通しをもって学習に取り組むことができた。またICTを効果的に活用し、生徒が資料から、根拠を明確にしながらか表現することや、多面的・多角的な考え方をすることができた。

美濃市支部

大西 眞帆

◆テーマ

よりよい社会の実現を目指す子が育つ
社会科学習

◆本年度の活動内容

9月：第1回研究会(小中合同)

授業者：大矢田小学校 宮本 章江 教諭

3年「働く人とわたしたちの暮らし 工場の仕事」

※市全体研修実施のため、1回のみ

◆本年度のまとめ

社会事象を自分事として捉えさせるために、どのように教材や発問を工夫するとよいか考えることができた。また、ICTを効果的に活用することで、前時までの資料を有効に活用し、学びを繋げたり、学習の仕方を自分で選択して、個別最適な学びに繋げたりする方途を考えることができた。

郡上市支部

伊地田 泰真

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会 授業実践交流

10月：第2回研究会

授業者：大和中学校 土師 唯我 教諭

3年公民「国の政治の仕組み」

11月：第3回研究会

授業者：郡上東中学校 神谷 直人 教諭

1年地理「北アメリカ州」

◆本年度のまとめ

単元の中で生徒にどの場面で思考・判断する力をつけるのかを焦点として、それぞれの教材観をもとに議論し、学び合うことができた。事実認識を獲得する授業実践から、今後の研究の方向を考えることができた。

美濃加茂市・加茂郡支部

小田 和樹

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：東中学校 佐藤 琢磨 教諭

2年歴史「近世の日本」

10月：第2回研究会

授業者：神淵中学校 王田 信次 教諭

1年歴史「中世の日本」

◆本年度のまとめ

単元における単位時間のつながりを明確にし
ながら、判断をせまる問いや他者との学び合い
に焦点をあて、美濃加茂市と加茂郡合同で研究
を進めた。判断する上での視点の与え方や事象
間をつなぐ問いの在り方について振り返り、意
欲的な学び合いにすることができた。

可児市支部

石井 雅大

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会
科学習～認識を深める工夫を通して、公民とし
ての資質・能力の基礎を育む～

◆本年度の活動内容

7月：第1回研究会

授業者：東可児中学校 今井 健太 教諭

3年公民「私たちの生活と文化」

12月：第2回研究会

授業者：中部中学校 福脇 大貴 教諭

3年公民：「地方自治と私たち」

◆本年度のまとめ

社会的な見方・考え方や知識・概念の活用、
判断を問う発問の工夫、他社との学び合いを生
み出す指導を視点に研究を進めた。判断を問う
発問の工夫では、根拠を明確にするための教師
の手立てについて深く学び合うことができた。

可児郡支部

渡邊 涼太

◆テーマ

社会認識を広げたり深めたりし、主体的により
よい社会の形成に参画する力を育てる社会科学
習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：向陽中学校 松本 和也 教諭

2年地理「中国・四国地方」

10月：第2回研究会

授業者：御嵩小学校 稲見 宇喬 教諭

6年歴史「戦国の世から天下統一へ」

◆本年度のまとめ

どちらの授業も、単元の流れと児童・生徒の
実態を考慮した工夫があった。全ての児童・生
徒全員が主体的に学習する授業づくりについ
て、活発に意見交流がなされた。今後は、「社会
の形成者」であることを実感させる工夫を盛り
込んだ授業提案を行っていく必要がある。

多治見市支部

吉村 匡生

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：南姫中学校 吉村 匡生 教諭

3年歴史「日本の高度経済成長」

10月：第2回研究会

授業者：多治見中学校 吉岡 沙百合 教諭

1年歴史「承久の乱」

◆本年度のまとめ

基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と
それらを活用させるための手立ての在り方、多
面的・多角的に考察し認識を深める手立て、指
導と評価の一体化の在り方、単元構想の工夫に
ついて研究を進めた。授業研究会を通して、と
もに学び合うことができた。

土岐市支部

高木 良太

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育て、「できた」「わかった」と実感できる授業の実現

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：肥田中学校 野田 大貴 教諭
1年歴史「古代までの日本」

10月：第2回研究会

授業者：泉中学校 堀 耕平 教諭
2年地理「中部地方」

◆本年度のまとめ

本市のテーマにもある「できた」「わかった」を実感させるには、事実と事実を丹念につなげていくことで、知識を認識に、記憶を理解へと昇華させる必要がある。そのためにも、指導と評価の一体化を図ること、教師が授業を振り返り、改善していくための手立てとなるよう、評価のあり方を見直していくことを確認した。

瑞浪市支部

河田 佳則

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第2回部会別研究会

講師：岐阜県弁護士会 可児 恵太 様
法教育講話「著作権を学ぶ」・実践交流

10月：第3回部会別研究会

授業者：瑞浪南中学校 河田 佳則 教諭
3年公民「人権と共生社会」

◆本年度のまとめ

10月の授業研では、「大阪空港公害訴訟」を取り上げて公共の福祉について考えた。ねらいと出口を明らかにした上でそれに適した課題を設定することの大切さや、生徒が社会的事象を自分事として捉えるための工夫について学び合うことができた。

恵那市支部

米満 和貴

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：明智中学校 山岡 啓人 教諭
1年地理「世界各地の人々の生活と環境」

10月：第2回研究会

授業者：山岡中学校 橋本 皐介 教諭
1年地理「世界の諸地域 アフリカ州」

◆本年度のまとめ

第1回授業研究会では指導内容を明確にできた。展開後段に砂漠化について専門家の話を位置づけることで、学習内容と現実をつなげて考えさせることができた。第2回授業研究会では、アフリカの食に視点をおき、食料自給率を日本と比較したり世界の穀物生産量を調べたりすることで、食料問題解決の困難さが理解できた。資料を精選することが、生徒の理解を深めることに繋がることを学び合えた。

中津川市支部

森 英之

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会（資料研究）

授業者：落合中学校 林 宏行 教諭
1年地理「世界各地の人々の生活と環境」

10月：第2回研究会

授業者：蛭川中学校 田口 寛 教諭
2年地理「中部地方」

◆本年度のまとめ

生徒が関心をもち、主体的に追究できる具体物やインタビュー等の資料が用意されていた。その答えを求めるための小集団追究の時間が確保され、その後の意欲的な全体追究に繋がった。また、ロイロノートを活用することで、多面的・多角的な考えの広まりや深まりを生み出すことができた。来年度も引き続き、生徒が主体的に学んでいく力を育むための授業展開の在り方を議論・研究していきたい。

高山市支部

古田 幹

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第1回研究会

授業者：北稜中学校 土井 慈雄 教諭
3年歴史「戦後日本の出発」

10月：第2回研究会

授業者：松倉中学校 藤本 和平 教諭
2年地理「中部地方」

◆本年度のまとめ

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を軸として研究を進めた。ICTの活用、机列の工夫、交流の目的や方法など、指導内容を中心に積極的に学び合うことができた。今後も継続して改善を図り、その中で「深い学び」を追究していきたい。

飛騨市支部

三ツ山 順貴

◆テーマ

よりよい社会の実現を目指す子が育つ
社会科学習

◆本年度の活動内容

6月：第2回研究会

授業者：古川小学校 芝田 大樹 教諭
5年社会科「寒い土地の暮らし」

11月：第4回研究会

授業者：古川中学校 小野 有輝 教諭
3年公民「現代の民主政治と社会」

◆本年度のまとめ

「自分ごと」として捉えられるよう地域教材に焦点をあて、研究を進めた。小中合同で研究を進め、学んだ事を生活とどのように繋げさせるのかということや、現在だけでなく未来を見据えた考え方をどのように身に付けさせるのかを積極的に学び合うことができた。

下呂市支部

今井 淳司

◆テーマ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる
社会科学習

◆本年度の活動内容

4月：第1回教科部会授業研究会

6月：第2回教科部会授業研究会

授業者：萩原南中学校 早川 祐吉 教諭
1年歴史：「古代国家の歩みと東アジア世界」

8月：第3回教科部会授業研究会

11月：第4回教科部会授業研究会

授業者：金山中学校 今井 淳司 教諭
1年地理：「アフリカ州」

◆本年度のまとめ

生徒の付箋の効果的な活用の仕方について学び合うことができた。また生徒が学びを深めるための全体交流、スクランブル交流について取り組んだ。